

資料

1995年チリ津波について

中村重久*

An note on the 1995 Chilean Tunamis

Shigehisa NAKAMURA*

Abstract: A breif note on the 1995 Chilean tsunamis is introduced in relation to the observed sporadic thermal variations at the offshore fixed tower of Kyoto University and the sea level variation as the tsunamis at the tide stations neighbor the tower.

南米太平洋沿岸域の海底地震は津波をともない、時として甚大な被害を及ぼす。とくに1960年チリ津波については、日本列島沿岸について詳細な調査が実施された。多くの研究も、日本のみならず米国やソ連（現在のロシア）などで発表されている。その後、1837年チリ津波や1985年チリ津波について検討された例もある（たとえば中村, 1997）。本文では、1995年7月31日に日本列島太平洋沿岸に到達したチリ津波について述べる。

気象庁によれば、1995年7月30日14時 JST 頃、南米チリの Antofagasta 北方、Chuquicamata 付近で地震 (M7.7) が発生した。この時の津波については、著者が1995年10月10日に記述している。ここでは、とくに津波

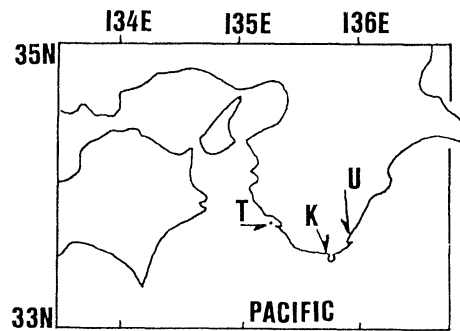


Fig.1 Coast lines around the offshore fixed tower of Kyoto University (T). Shionomizaki (Kushimoto) and Urugami for K and U.

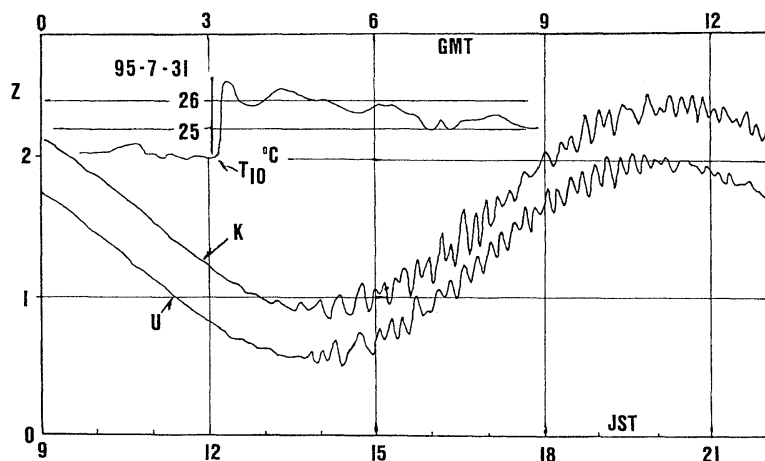


Fig.2 Thermal variations at the offshore fixed tower T and the 1995 Chilean tsunamis recorded at the tide stations K and U.

到達時刻前後に、紀伊半島沖の観測塔（京都大学所管）で記録された海面下 10m の水温変動について検討する。

観測塔は沖合距離約 2km にあり、岩礁上に固定されている。岩礁周辺は水深 32m で、平坦な細砂が海底にある。このため、海中の変動も気象観測と同程度、あるいはさらに高精度で計測記録できる。海面に浮遊する観測船や、観測ブイでは計測できない現象をとらえることができる点は、沖合の観測塔の最大の長所である。この観測塔の付近には、気象庁所管の検潮所として潮岬（串本）と浦神とがある。それらの地理的位置は Fig. 1 に示した。

この観測塔では、Fig. 2 に示すように、海面下 10m の水温が、12時07分 JST から 1 分間で、24.6°C から 25.1°C へと変化した。このような水温変化は、これまでの観測塔の記録では例がない。時刻から考えて、7月30日14時

JST 頃発生した南米チリの地震によるもの以外に水温変化の原因は見当たらない。

加うるに、潮岬（串本）と浦神とでは、明らかにチリ津波による海水位変動をとらえている。観測塔付近の温度成層の観測例からみて、Fig. 2 の水温変化は、海水の水平運動によるものと判断しなくてはならない。

文 献

中村重久（1997）：地震津波史料余滴，田辺（和歌山県），139p.

1997年 5月12日受付

1997年 5月30日受理